

令和7年度 富山市科学博物館協議会 議事概要

- 1 日 時 令和7年7月25日（金）午後3時から午後4時30分まで
- 2 場 所 富山市科学博物館 サイエンス・ラボ
- 3 出席者 委 員：青木委員、飯田委員、高木委員、牧野委員、宮池委員、
安井委員、山崎委員、吉田委員 計8名
事務局：笠間科学博物館長、林学芸課長、大釜総務課長、
坂井主幹学芸員、市川主幹学芸員、
市川総務課主幹、武脇総務課副主幹、横野会計年度任用職員

4 内 容

(1) あいさつ 笠間科学博物館館長

- ・ 当館では、普及・展示事業として、特別展や企画展、学芸員が直接解説するサイエンスライブや星空観察会を行い、また、資料等の収集保管や調査研究として、標本等のデータベース化による公開や、研究活動に関する報告書の発行等を行い、自然と科学の世界に親しんでいただく活動や、研究成果等の発信に取り組んでいる。
- ・ 一方、常設展示の老朽化や、時代の変化と潮流に対応した展示への更新が必要となったため、令和6年2月に「富山市科学博物館展示更新計画」を策定し、その第1期事業として、「サイエンス・ラボ」を令和7年3月に整備した。
- ・ 「サイエンス・ラボ」では、これまで出来なかった火花が出る実験や、暗さを必要とする実験、大型モニターを用いた解説など、実験と解説の質が向上したほか、座って観覧できる環境としたことも功を奏し、サイエンスライブの平均観覧者数は増加し、観覧者との会話や質問が増え、サイエンスコミュニケーションがより深まっている。
- ・ 本日は、当館が自然科学の総合博物館として、市民の自然科学への関心と理解を深める役割を、引き続き担っていくことができるよう、様々な観点から、委員の皆様の忌憚のないご意見やご助言を賜りたい。

(2) 協議会の会長・副会長の選出

委員の互選により、青木委員が会長、牧野委員が副会長に選出された。

(3) 議事

青木会長が議長となり、進められた。

ア. 令和6年度事業報告

イ. 令和7年度事業計画

5 主な質疑応答

(1) 令和6年度事業報告について

会 長： 入館者数の変動は、新型コロナウイルス感染症の影響で減って以降、回復してきたが、昨年度は一昨年度より少なかった。コロナ以前に戻ったということか。

事務局： 一昨年度は、プラネタリウムの更新や新型コロナウイルス感染症が5類感染症に位置付けられたことで入館者数が増え、昭和54年の開館以降で最多の入館者数だった。昨年度の入館者数はコロナ前の水準である。

会 長： 入館者数に能登半島地震の影響はあるか。

事務局： あまりないと考えられる。

委 員： 市内、県内、あるいは県外の来館者の内訳として、市内の方が増えている、あるいは県外の方が増えている、という情報があれば教えていただきたい。

事務局： 学校や幼稚園の観覧状況によると、市内、県内が圧倒的に多く、県外は石川県等近隣から主に来ていただいている状況である。なお、今年1月にアメリカの新聞「ニューヨークタイムズ」で、富山市が「2025年に行くべき世界の52か所」の一つに選ばれたが、外国人の来館については、4月からの入館者数が298人で、入館者数全体の2パーセントに留まっている。

会 長： 小学校4年生対象の学習投影について、コロナの影響でバスによる輸送に問題があったと思うが、解消されたのか。

事務局： バス輸送に関して、昨年度は問題なく対応できた。ただし、インフルエンザによる学級閉鎖のため実施できなかった事案が1件あった。今年度も問題なくバスの手配はできている。

委 員： 立山カルデラ砂防博物館の立場からのコメントだが、富山市科学博物館と立山カルデラ砂防博物館の共同企画展「立山さんろく 自然の魅力」は、科学博物館から声かけしていただいて開催した。今まで立山という上の方ばかり紹介していたが、今回は山麓部の魅力を紹介し、非常に充実した展示になっていた。立山カルデラ砂防博物館での開催時に非常に評判が良かった。科学博物館が、富山県の科学系の博物館の手本、自然史系の博物館の見本になるように、ぜひ今後もリーダーシップをとっていけるような活動や共同企画の活動を続けてほしい。

委 員： 以前、水墨美術館で鳥獣の作品の解説を科学博物館の学芸員が行っていた。現在、立山カルデラ砂防博物館で「雨」の企画展をしており、何か連携できそうである。「友の会」として中央植物園で「セミ」の抜け殻探しを企画したが、このように分野に関係なく連携して行ってほしい。

会 長： 世界の博物館では、最近、サイエンスとアート（芸術）がコラボレーションしている。富山県では、黒部市美術館と魚津埋没林博物館が、蜃気楼をテーマにタイアップしている。科学博物館も美術館とタイアップして、頑張ってもらいたい。

委 員： 情報発信のところで、X（旧ツイッター）やフェイスブック、ウェブサイトなど、こんなに多くの手段での発信を誰が担当しているのか。

科学博物館には大変たくさんさんの収蔵標本があるが、館報19ページの標本

分類と20ページの標本等データベースの分類が異なるのはなぜか。

事務局： 科学博物館ウェブサイトは、ウェブサイトに詳しい職員が全体の管理をし、個々のイベントのページについては、そのイベント担当者が作成している。また、SNSについて、基本的にはイベント等の担当者か、SNSに明るい職員が情報発信している。SNSの発信件数をもっと増やした方がよいのではないかと、フェイスブックやXは若い人向けではないので、インスタグラムを始めようかという話もしている。情報発信力の改善が課題と考えている。

標本分類の違いについては、館報19ページは昔からの当館の分類方法、20ページは国のS-Netでのデータセット分類である。

会長： ウェブサイトについて、他館では休館日がわかりづらい例があり、基本的なことはしっかり伝えてほしい。

(2) 令和7年度事業計画について

委員： 令和8年3月から始まる企画展「地球時間の旅」と、同時期にオープンする展示更新第2期の内容をリンクさせる計画はあるのか。

事務局： 内容のリンクは計画していない。テーマが重なる部分はあるが、基本的には巡回してきたものそのままを想定しており、一部、常設展に出さないもので出せるものは出す予定である。

委員： 常設展と企画展のリンクにより、富山の特徴と他地域の特徴の違いやつながりなどを紹介できるため、掲示などで案内をしてもらいたい。

委員： 展示更新の予算がついているのはよかった。

館報の9ページで、新しくできたサイエンス・ラボに施設使用料が設定されているが、サイエンス・ラボを貸し出しているということか。

事務局： サイエンス・ラボは貸し部屋の対象である。ただし、あくまで当館の主催イベント等を行わない日時のみである。基本的には土日祝日はイベントがほとんど入っているので、それ以外の平日で可能なら貸すこととなる。

会長： 富山市の施設のエレベーターが1年間近く動かないというのは、どうかと思う。体の不自由な方や小さなお子さんが、3階のプラネタリウムにエレベーターを使って行けないというのは異常だと思う。市の施設としてこのような状態は良くない。

事務局： 富山市議会令和7年6月定例会でリニューアルの補正予算が承認されたことから、当館も最新の耐震基準などにしっかりと対応し、安全対策を施して再開するのがベストと考える。現状、車椅子の方や小さなお子様などは、お身体は運べないが、車椅子やベビーカーを当館スタッフが運ぶお手伝いをしている。

委員： 国立科学博物館では、フランスからクロマニヨン人の頭の骨を借りると聞いたが、科学博物館でも標本を貸すだけではなく、他から借りることもあるのか。

事務局： 鳥の特別展のときは、あちこちの施設等から借りて展示した。企画の内容により、特に生物系の展示では他施設等から借りて展示している。

委員： 展示更新について、流行のARやプロジェクションマッピングも計画には

あるが、科学博物館の最大の強みは実物標本をたくさん持っていることだと思う。実物の展示を続けてほしい。

事務局： デジタルの時代になり、映像や動画であれば、自宅でも見ることができるなかで、実物に出会える、それに関係する人に会える、体験ができるという博物館の役割をしっかりと担えるように、展示を作っていきたい。

会長： 最近、映像技術の進歩はすごいが、時代に取り残されない程度に、古き良き博物館の部分も継承していただけるとよい。

委員： イベントの子供向けの周知はどのように行っているか。

事務局： 特別展では、市内小中学校の児童生徒に1人1枚チラシを配布、富山市以外の市町村には、各学校に数枚配布して周知を図った。その他、ホームページやSNSで周知している。

委員： 紙では、子どもから親に渡らない場合がある。富山市は、保護者連絡アプリ「tetoru」で学校から親に直接情報を配信している。これを周知に活用できないか。

事務局： 以前、当館のイベントのPRに「tetoru」の活用を検討したが、担当課からは、当該アプリは緊急連絡を主目的としており、イベントの周知には使用できないと言われている。

会長： 今の学生は、テレビも新聞も見ないので、どうやって伝えるのが難しい。教員がもっとサイエンスに興味をもち、子どもたちに発信してくれればよいと思う。

※ 発言内容を一部整理しております。